（右）四季折々、豊かな自然が楽しめる平筒沼。
（左）「遊歩道や浮桟橋もあり、散歩にもおすすめですよ」と語る髙橋さん（左）と伊藤さん。

〝おらほの宝〟平筒沼（びょうどうぬま）をより魅力ある観光スポットへ

登米市平筒沼
水・いきもの保全隊

水草の刈り取りで水質を改善

登米市南部の米山町と豊里町にまたがる平筒沼は、35ｈａの面積を有する沼。ヘラブナの釣り場として知られるほか、春には外周に植えられた約八百本の桜が咲き誇り、県内屈指の花見スポットとして人気を集めています。この平筒沼の自然保護や賑わいづくりの活動を行っているのが、米山町の吉田コミュニティ運営協議会です。会長を務める髙橋正司さんは、「夏にはスイレンやハスの花が咲き、秋には紅葉の名所、冬には白鳥の飛来地として、一年を通して市民憩いの場となっています」と、沼の魅力について語ります。

しかし、近年、ハスやヒシといった水生植物が過剰繁殖し、枯死体が沼底に蓄積することによる底質の悪化や貧酸素化によって、沼に生息する生物に影響を及ぼすことが懸念されました。その対策として、２０１３（平成25）年、吉田コミュニティ運営協議会のメンバーが中心となり、登米市平筒沼水・いきもの保全隊を結成。毎年６～９月の間に計10回ほど、保全隊メンバーの手で、繁茂したハスやヒシの刈り取りを実施するようになりました。この活動により、沼の景観の向上が図られるとともに、水質改善と生態系の保全が期待されます。

機械化で作業負担が軽減

登米市環境課では、市に寄せられたふるさと応援寄附金の一部を使い、今年度、刈取装置を1台購入しました。そして、小型船とともに装置を借り受けた保全隊により、この夏、初めて機械によるハスやヒシの刈り取り作業が行われました。保全隊の代表・伊藤昭一さんは「これまでは手漕ぎの船に乗り、長いカマを使って手刈りしていたので重労働でしたが、装置を使うことで作業負担が軽減されました」とにっこり。髙橋さんも、「装置のおかげで効率化が図られ、刈り取り量も2～3割アップしました」と、寄附金のありがたみを実感しています。

今年3月にスタートした宮城オルレの登米コースにも組み込まれている平筒沼。髙橋さんと伊藤さんは「この沼は〝おらほの宝〟です。これからも市の支援を受けながら、先人が守ってきた生態系の保全や水質の改善に努め、来訪される方々にもっと楽しんでいただける行楽地にしていきたいですね」と、前向きな言葉で締めくくってくれました。

（上）登米市平筒沼水・いきもの保全隊は、現在33名の隊員が所属、活躍中です。
（左）小型船に装着するタイプの刈取装置。その日に刈り取る範囲を決めて作業を進めていきます。

寄附金活用事業紹介 1
水草刈取装置購入事業
登米だより TOME LETTER

寄附金活用事業紹介 2
市有林管理
登米だより TOME LETTER

健全な森づくりに日々励み 緑の山林を次の世代へつなぐ

津山町森林組合

（上）木目も色味も品が良い津山杉。建築材をはじめ、用途は多彩です。
（左）組合では750名余りの組合員が所有する山林の管理を行っています。

恩恵を得るために適正な整備を

登米市津山町は面積の82％に当たる5,609haが山林という〝木の町〟です。そして、気候風土や土壌が杉の適地であったことから、その大半を植林した杉が占めている点が特徴です。こうした背景から、津山地区は古くから林業や製材加工業が盛んな土地柄でした。中でも地元産の杉材を使った矢羽木工芸品は、広く特産品として知られています。

同地区の山林の経営管理を行っているのが、1960（昭和35）年に設立された津山町森林組合です。「適正に整備された山林は、二酸化炭素を吸収して地球温暖化を防止する、土砂の流出を抑え災害を未然に防ぐ、などの機能があります。私たちは山林がそうした公益的機能を発揮できるよう手助けをしています」と説明するのは、総務課長の佐々木国彦さん。続けて林産課長の野村治さんが、「私たちの仕事は主に、伐採して出荷する〝林産〟と、植樹し保育する〝造林〟の2つです」と作業内容について教えてくれました。

伐採と造林の一貫作業を推進

津山地区の山にある杉は、戦後に植えられて60年以上が過ぎ、伐採時期を迎えているものがほとんどです。森林整備課長の佐々木寿光さんは、「今私たちがこうして伐採し、加工し、いろいろな形で木材を活用することができているのも、先人たちが植林してくれたおかげ。ですから私たちも伐採したら植林をして、次世代、次々世代へ豊かな山林を〝財産〟として残していく義務があると思っています」と語ります。そこで組合では、伐採と造林の一貫作業システムを確立し、作業の効率化や低コスト化を図っています。今年度、登米市産業経済部農林振興課では、約2600haある市有林の管理にふるさと応援寄附金を活用。津山地区の市有林については津山町森林組合に協力を仰ぎ、造林の間伐を進めています。

「市有林の整備にふるさと応援寄附金が充てられていると知り、感謝の念に堪えません」と野村さん。「木が育つまでには長い時間がかかりますが、持続可能な社会づくりの一環として、これからも市と連携を取りながら地区内の山林の健全化に努めていきます」と話していました。

（右）植林の様子。毎年約15haの植林を行っています。
（左）左から野村さん、佐々木国彦さん、佐々木寿光さん。「若い人に山の魅力を伝えていくことが課題です」。

（右）なまこ壁が目を惹く和風な外観。石ノ森キャラが出迎えてくれます。
（左）「人間·石ノ森章太郎」を紹介する常設展示室は温かみあふれる空間。

開館20周年。マンガの力で町おこし、そして人おこしを

石ノ森章太郎ふるさと記念館

〝漫画の王様〟の軌跡を紹介

『サイボーグ009』や『仮面ライダー』などの生みの親で、〝漫画の王様〟と称される石ノ森章太郎氏は、1938（昭和13）年、現在の登米市中田町石森で生まれ、高校時代までこの地で過ごしました。

石ノ森章太郎ふるさと記念館は、その生家の近くに2000（平成12）年にオープンしました。常設展示室には、電気仕掛けで動く生家のジオラマコーナー、愛用品や宝物などが展示されたトキワ荘の再現コーナーなどが設けられ、〝漫画家〟石ノ森章太郎氏の歴史をビジュアル的に楽しく紹介。オリジナルアニメを常時上映するビデオシアターや、作品が閲覧できるライブラリーも備えています。

没後22年が経ってもなお、原作作品が特撮テレビドラマ化され続け、根強い人気を誇る石ノ森章太郎氏。「お子さんからマニアの方まで幅広い層にご来館いただいております。親子三代で楽しまれている方もお見受けしますよ」という副館長の秋山幸治さんの言葉にも納得です。

マンガ文化の振興を目指して

開館以来、毎年開催している特別企画展も目玉の一つ。主に石ノ森章太郎氏の作品を中心にマンガやアニメの展示を行い、好評を博しています。今年度の2回の特別企画展には、ふるさと応援寄附金の一部が充当されました。12月12日からは第63回特別企画展として、「マンガ家入門展」を開催します。

「今年は開館20周年ですので、石ノ森作品に焦点を当てた特別企画展を開催しています」と秋山さん。「寄附金のおかげで特別企画展を実施できたことはうれしい限りです。今後もみなさまからいただいた善意のお気持ちを大切にしながら、マンガ文化の振興のために、たくさんの方に喜んでいただける企画を考えていきたいですね」。

ふるさとの誇りである石ノ森章太郎氏を顕彰するとともに、マンガを活用した生涯学習の推進の場としても重要な役割を果たしている石ノ森章太郎ふるさと記念館。今後の特別企画展からも目が離せません。

（上）「12月からの特別企画展もご期待ください」と話す秋山さん。
（左）代表的な8作品を通して石ノ森デザインの秘密に迫る「石ノ森キャラクターデザイン展」。

寄附金活用事業紹介 3
石ノ森章太郎ふるさと記念館特別企画展
登米だより TOME LETTER

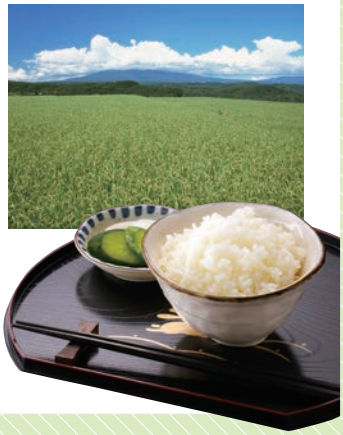
とめの自慢を
ピックアップして
ご紹介します!

聞かせて! 登米(とめ)自慢

1 環境保全米発祥の地

豊かな自然と安全・安心な食を未来へ引き継ぐため、自然との共存を目指した「環境保全型農業」を推進しています。「赤とんぼが乱舞する産地を目指そう」を合言葉にスタートした「環境保全米」の栽培は、登米市が発祥の地です。

農薬や化学肥料をできるだけ減らし、産地や栽培方法を証明する「栽培履歴簿」の記帳をはじめ、食味調査、DNA鑑定、残留農薬分析などを実施した安全で安心なお米です。



2 全国トップレベルの味と質「登米産牛」

登米市の「肉用牛」の生産量は東北随一であり、2017年の肉用牛市町村別産出額は約87億円で、本州で1位、全国で8位になりました。登米市で飼育されている肉用牛の多くは黒毛和牛で、一定以上の条件を満たした上質なものは、超高級ブランド牛肉「仙台牛」として出荷されています。

なお、平成29年度に開催された「第11回全国和牛能力共進会宮城大会」第2区部門において、登米市の畜産農家が日本一に当たる賞を獲得しました。

「仙台牛」とは

㈳日本食肉格付協会が行う「枝肉取引規格」という日本全国共通の基準に基づいたランク付けで、肉質等級「5」と評されたものだけが名乗ることができる、超高級ブランド牛肉「仙台牛」。その約4割が登米地域産です。

3 日本有数のボート場

8月には、「長沼はすまつり」が開催され、湖面いっぱいに咲くハスを楽しむことができます。

「長沼ボート場」は、全国でも4か所しかない国際A級コースの優れた競技環境を持つボート競技場です。全国各地のボート選手が、練習や強化合宿、大会競技などで訪れるほか、子どもたちをはじめとした市民が海洋性スポーツを気軽に楽しめる交流施設として、多くの方々に利用され親しまれています。

4 渡り鳥、ゲンジボタルが舞う豊かな自然

ラムサール条約登録湿地「伊豆沼・内沼」は多種多様な生物が生息する渡り鳥の楽園です。他にも、ゲンジボタルが群生する鱒淵川など貴重な自然が数多く残っています。

毎年7月上旬に見られる
-ゲンジボタルの乱舞

5 宮城県初の森林セラピー基地

登米市は、森林資源も豊かで、総面積の4割強が森林で占められ、「杉」の産地としても有名です。

宮城県で唯一、森林セラピー基地として認定されている「登米ふれあいの森」の園内には、8つの散策コースが整備され、四季折々の景色を楽しみながらの散策は、森林が持つ癒しの効果を十分に体感することができます。

6 ユネスコ無形文化遺産「米川の水かぶり」

「米川の水かぶり」は、ユネスコ無形文化遺産「来訪神　仮面・仮装の神々」の来訪神行事であり、国の重要無形民俗文化財にも指定されています。800年以上の歴史と伝統を誇る火伏せ行事「米川の水かぶり」は、毎年2月の初午(はつうま)の日に東和町米川地区で開催されます。

地区の男だけが参加することのできる行事で、かまどのすすを顔に塗り、わらで作った水かぶり装束を身にまとい、大慈寺境内にある秋葉大権現に火伏せを祈願します。お神酒を頂いて神の使いとなった一行は、奇声をあげて各家庭の屋根に向かってバケツやおけの水をかけながら町を練り歩きます。地域の人たちは一行の纏っている装束からわらを抜きとり、それを自宅の屋根に投げ上げ火難除けのお守りとしています。

【お問い合わせ】
登米市まちづくり推進部観光シティプロモーション課
〒987-0511 宮城県登米市迫町佐沼字中江二丁目6番地1
TEL 0220-23-7331　FAX 0220-22-9164
http://www.city.tome.miyagi.jp　E-MAIL tome-life@city.tome.miyagi.jp

宮城県登米市

うまし、たくまし、登米市
登米市シティプロモーションロゴマーク

登米市ホームページ

発行日／令和2年11月